Argonauta 21:30-31 (2012)

大垣さんの思い出

佐藤路子

私は番所崎の南浜でカニと海藻の調査をしていたので、大潮になると潮が引いている間は磯に出ずっぱりだったのですが、磯で知り合いに会った回数は大垣さんが一番多かったように思います。

自分自身のフィールド調査に慣れたころ、ポケットのたくさんついた帆布製の調査カバンが気になり、磯で会った大垣さんに「そのカバン、いいですね」と水を向けると、「ここにはルーペが入っていて、ここはユニパックで…」とコンパクトだけれど何でも入っていること、コドラートはカバンに合わせて作られていることなど、そのこだわりをうれしそうに語ってくださいました。

大垣さんとの出会いは、私が院生で貝類調査に参加した時でした。貝を手に参加者の方と議論している姿に「頭の良さそうな人だな、でもちょっと怖そう」という印象を持ちました。頭が切れて、疑問は誰に対しても容赦なく投げかける孤高の研究者のイメージは最後までずっと変わらなかったけれど、大垣さんと打ち解けて話ができたのはこれが最初で、とても嬉しかったのを覚えています。

その後私が一澤帆布で似たようなカバンを買って同じポケットに同じ物を入れてみたのは言うまでもありませんが、長年フィールドワークをやっている人の持ち物は合理的で無駄のないことが実際真似をしてみてよく分かりました。

大垣さんは瀬戸の OB として、調査や図書閲覧の折に出会った院生には「最近どう？」と声をかけて、いつも私達のことを気にかけてくれているようでした。

院生たちの懐具合も心配してか、私には「うちの塾で英語の講師をやってみない？高校生の女の子２人だけのクラスだから、同性の若い先生がいいんじゃない？」と声をかけてくださいました。「学校の教科書の復習だけはやるようにして、あとは佐藤さんの自由にしてくれたらいいよ」と太っ腹なお言葉をいただいたので、かなり自由に楽しく進めさせてもらいました。大垣さんのことだから何かあったらチクリと一言あると思いきや、特に何も言われず、それはすなわち「良い」という評価なのだなと都合よく解釈しておくことにしました。

しかし残念なことにその塾講師の仕事は半年ぐらいで流れてしまいました。

なんでも生徒の一人がアメリカに留学するので塾をやめることになり、残されたもう片方の生徒さんは「〇〇ちゃんと一緒に授業を受けられないんだったら私も塾やめる」とい

うことで、クラスそのものがなくなってしまったからでした。
　大垣さんは、決して佐藤さんの教え方が悪かったわけじゃないよとハッキリした態度で、私のショックをぬぐい去ってくれました。
　時に辛辣なことを言うこともあるけれど、人の気持ちに鈍感なわけではなく、人の性格は見抜いているのだなということが分かった一件でした。

　こんなこともありました。
　当時、夫の勤務先の福井へ引っ越して大学の非常勤講師の仕事をしていたのですが、色々な不安や悩みから精神的に疲れきって廃人のようになっていました。そんな時に貝類調査のメールが大垣さんから来たので、不参加の旨と簡単な近況を伝えるだけのメールを送ったのですが、こんな事が書いてありました。
　「あまり根を詰めて気疲れしないようにしてください…（中略）…いいかげんにやったほうがいいですよ。洗濯物などは、雨が降っても２、３日は取り込まずに放っておきましょう。ではまた」
　救われました。
　そののち、瀬戸へ行くことがあったのですが、研究棟でばったり大垣さんに会い、ご自身のつらかった思い出話をしてくださったのでした。
　私の精神状態を見抜き、あのような言葉をかけてくれたのは、実は大垣さん１人だけでした。

　大垣さん、いつも私達のことを気にかけてくださって、本当にありがとうございました。
　そして、あのような世代も所属も様々な人々が集まって、あの広い岩礁で調査できたことは何と貴重だったのか…あれは私の中の財産です。

（さとう　みちこ・京都大学瀬戸臨海実験所 元院生）